

今年の1月、FFJCPの会合があり、東京に滞在していた。1月25日、ANA羽田発、萩・石見空港便で、地元益田市に帰ろうとした時だった。1日2便しかないローカル空港。雪の少ない地域なのに、この日に限って数十年ぶりの大雪となり、2便とも欠航となった。その羽田空港での出来事が私たちが「患者や体力

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの副フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、ターンで益田市移住。益田ドライブイン・スクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

弱者へのサービス 体験

のないお年寄りに便宜を図ってもらえることが分かった。午前の便、午後の便とも欠航はすぐに決定されず、朝から夕方まで羽田空港で待機することとなった。この待ち時間は相当に疲れる。

最終的に欠航と決定。早く欠航を決断してほしかった。明日の便の予約を取るために列に並んだ。1時間以上待たされて、ようやく私の番。カウンターで翌26日の午前の出発予約を取った。ほっとする間もなく、係員が言った。「荷物を受け取ってください」と。そこで怒りが爆発。「明日の予約をしたので荷物は明日の便にまわしてほしい」と伝えた。これから今晩宿泊するホテルも探さなければいけないのに。上司に相談していたのだろう20分以上待たされた。カウンター越しに困った様子がうかがえた。今でも当然なことを言ったと思っ

た。私はその場でしばらく待っていたが、戻ってきてロッカーのキーを渡された。コインロッカーに荷物を入れてきてくれたのだ。翌日荷物を出すのに300円は使ったが私を納得させる対応だった。

その時、小さな声で耳打ちされた。「明日搭乗手続きするときにはここに並ばなくてもいいですよ」。40番のカウンター窓口に行ってくださいと伝えられた。翌日羽田空港に着き、ロッカーから荷物を引き出し、その40番窓口に行った。中に入るとテーブルとソファがあり、係員が招き入れてくれた。誰もいない。私だけが室内にいる。イスに着くと搭乗手続き、荷物の預けが出来た。並はずゆっくりと楽に搭乗手続きが出来、その部屋から出発保安検査場に通じていてスムーズに手続きが完了した。体調が悪くお願いすれば出発ゲートまで車で案内していただける。弱者にとっては有難いことだ。欠航したが幸いして安心出来るコースを知ることとなった。